

NEWSLETTER

No.22

2009年11月20日

会長 山梨正明 事務局 〒600-8268京都市下京区七条通大宮東入大工町125番地の1 龍谷大学
東森 勲 研究室内

TEL 075-343-3311 (代表) FAX 075-343-4302

psj.secretary_at_gmail.com (注意: _at_を半角の@に置き換えて下さい)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会 Newsletter 第22号をお届けします。さる9月20日に、第42回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

=====

《日本語用論学会 10周年の思い出》

★お酒と語用論

山梨正明

日本語用論学会は創立からすでに12年を過ぎ、国際的な学会への一步を踏み出している。本学会が、今日まで発展してきた原動力は何かと考えた場合、「まずお酒による人間的な交流ではなかったかでしょうか」と答えるならば、驚かれる学会員の方(あるいは、不謹慎であるとお叱りになる方)もおられるかもしれない。しかし、お酒は確かにこの学会を産み出し、支えてきてくれた力とスピリッツ(!?)の一部であったように思う。いまでも懐かしく思い出されるのは、語用論学会の設立当時の運営委員会の後に、何人かの先生が参加されたお酒の会である。その当時は、語用論学会の運営委員会の後は必ずといっていい程、京都や梅田界限で、お酒を飲みながら学会の未来について語り、学問・人生について語り合ったのが懐かしく思い出される。中でも、

特に初代会長の小泉保先生と初代編集委員長の児玉徳美先生が、実にお酒がお好きで(いや、お酒が醸し出す雰囲気の中で学会の未来について語り、学問・人生について語り合うのがお好きで)、そこに高原脩先生、澤田治美先生、筆者、林宅男先生ご夫妻、内田聖二先生、東森勲先生、田中廣明先生プラス何人かの中堅、若手の先生方が加わって楽しく歓談したのを覚えている。お酒の会のための語用論学会なのか、語用論学会のためのお酒の会なのか、どちらがメインなのかよく分からない雰囲気(!?)。一部の先生は、おそらく学会の運営委員会に出席するよりも、その後の酩酊の世界に参加するのが楽しみで来られていたような気もしないではない。実にプラグマティック(!?)な動機と言えるのかも知れない。日本語用論学会は、他の言語学関係の学会に比べて、非常に家族的な雰囲気のある学会である。今から考えると、運営委員会の後のお酒の場が、現在に至る本学会の家族的な雰囲気を作り出すプラグマティックな力(!)になってきたと言えるかもしれない。ここに本学会の原点があるような気がする。日本語用論学会は、国際化を視野に入れながら全国学会として着実に発展しているが、単なる知の探究の場ではなく、これまで以上に人間的な交流を楽しむことができる学会になるよう、一学会員として努力していきたいと願っている。

★日本語用論学会を設立するまで

小泉 保

わたしは、『言外の言語学—日本語語用論』を1990年に三省堂から出版する以前から、語用論が他の言語理論とは異なり、言語活動の全般を律するばかりでなく、文学の分野にも適用可能であると考えていました。

日本語用論学会の設立は、設立趣意書の作成と配布から始まりました。1998年5月16日に次の人々に京都のホテルに集まってもらいました。

内田聖二、久保進、小泉保、児玉徳美、澤田治美、高司正夫、高原脩、林宅男、林礼子、東森勲、山梨正明。

ここで、趣意書の内容と送付先が検討されました。さらに委員会を重ねて、学会の組織や大会運営の細目が決定されました。そこで12月5日に関西外国語大学で第1回日本語用論学会を華々しく開催することができました。

第2回目は1999年12月4日立命館大学で開催されました。実は、第3回あたりまでは、学会の運営も容易ではありませんでしたが、その後は学会の基礎が固まり、会員も増え、学会としての活力が勢いよくなってきました。

お陰で一昨年は第10回の国際語用論学会が関西外大で盛大に執り行われました。今後のさらなる進展を祈念しております。

★10周年記念世界大会の思い出

澤田治美

第10回大会は、2007年12月8日（土）、9日（日）に「10周年記念世界大会」と銘打って、関西外国語大学で開催された。幸い天候に恵まれて、多くの参加者がぞくぞくとキャンパスに集まった。この大会の趣旨は、学会発足10周年を記念して、できるだけ多くの発表者・参加者に来てもらうこと、また海外から可能な限り多くの参加者を募ることによって、学会を

国際化することであった。林宅男事務局長のご尽力によって、海外からの発表を積極的に呼びかけたところ、前年の3倍近い応募があった。初日には、ワークショップ14件（4室）、ポスター発表6件、研究発表29件（英語による発表5室を含んで合計8室）、二日目には、研究発表33件（英語による発表5室を含んで合計9室）を発表していただいた。

海外からは、アジア諸国からだけでなく、遠く、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパの他、アフリカからの参加者もあった。また、大会予稿集は日英両語で書かれ、例年よりもはるかに分厚いものとなった。大会の前夜、ゲストスピーカーであるTuen A. van Dijk（スペイン）、Jef Verschueren（ベルギー）、Ziran He（何自然）（中国）、池上嘉彦教授、井出祥子教授などの方々を招いて歓迎会を開催し、親交を深めることができた。初日の夜の懇親会は数ヶ国語が飛び交い、大いに盛り上がった。

この大会は、ワークショップ、ポスター発表、日本語による研究発表、英語による研究発表、基調講演、シンポジウム、という盛りだくさんのプログラムから成っていたが、参加者の国籍からしても、読まれた論文の質と量からしても画期的な大会となったと言えよう。学会が一步一步国際化されつつあることを肌で感じた方々も多かったのではなかろうか。

二日間の開催、会場準備、海外からのゲストスピーカーのお世話（滞在や送迎など）などで多忙を極めたが、得たものはそれ以上に大きかった。Verschueren教授、He（何）教授、陳教授、池上教授、林宅男教授、林礼子教授、余教授らと朝はキャンパス近くの「菊竹」という食堂で朝食をとったが、味噌汁、焼き魚、海苔などの「日本的」メニューが外国人の先生方に大好評であった。

一つ当てがはずれたのは、二日目の食堂である。大学当局と交渉して無理に厚

生南館第3食堂に営業してもらうことにして、当店自慢のメニューを用意したものの、お客の入りは散々だった。決して「味」のせいではなかった。「予想」を立てることの難しさを実感したしだいである。

★思い出と将来への夢

児玉徳美

1998年10月、京都駅近くのレストランで日本語用論学会の設立発起人の会があり、12月に関西外国語大学で第1回大会が開かれた。その後第10回大会まで運営委員を務めた。この10年間、会員や発表者は増え続けてきた。海外の動向にも呼応して、研究領域は大会発表や機関誌『語用論研究』（1999年創刊）からうかがえるように、年々広がっている。語用論を介して人間の姿がかいま見えるようになった。学会には他にも余得があった。大会やその準備のための運営委員会のあと、小泉先生を先頭にして近くの居酒屋で一杯やるのも大きな楽しみであった。この宴では互いに本音で語り合い、学会運営や研究の大いなる活力源にもなった。

1990年代は20世紀後半の言語学界をリードしてきた生成文法の見直しの時期であったのかもしれない。1993年には英語語法文法学会と日本機能言語学会が設立され、機関誌の『英語語法文法研究』と『機能言語学』の創刊号がそれぞれ1994年と1998年に出ている。日本語用論学会を含め、いずれも関西で産声をあげたものであり、文脈から独立した抽象的な文を最大の分析単位とする呪縛から解放されている。それぞれの創設期にかかわり、幸いにも言語研究の転換期に立ち会うことができた。

21世紀の言語研究はどうなるのである

うか。先ほど語用論を介して「人間の姿がかいま見える」と述べたが、「人間の姿が必ずしも十分見えない」の意味でもある。言語研究が言語を操る人間の姿に接するためには、今日の語用論よりさらに分析対象を拡大し、主要な対象領域として言説(discourse)を含めるべきと思う。ここでの課題は話し手の生得的な言語能力や認知上の事態把握、あるいは隣接する2、3の文の関連性や含意にとどまらない。社会における主張・価値観・(非)合理性・語るべきことを故意に語らない「不作為」の「作為」などを見分ける必要がある。この方向は21世紀の言語研究に対する私の夢である。

★★★★★★★★★★

《事務局より》

★第12回大会ご案内(→詳しくは、同封のプログラムをご覧ください:

<http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>)

日本語用論学会第12回大会

2009年12月5日(土)6日(日)

龍谷大学深草キャンパス

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

TEL: 075-642-1111 FAX: 075-642-8867

＜交通アクセス: (1)地下鉄京都駅から竹田方面へ「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約7分、(2)JR京都駅から奈良方面へ「稲荷」駅下車、南西へ徒歩約8分、(3)京阪祇園四条駅から淀屋橋方面へ「深草」駅下車、西へ徒歩約3分＞

<http://www.ryukoku.ac.jp/fukakusa.html>

大会発表応募総数は57件あり、12回大会プログラムでは研究発表27件採用(英語8件、日本語19件)、ワークショップは5件(1件が一般応募で、4件が特別ワー

クショップ)、ポスター22件、懇話発表3件(堀江薫/金アラン(東北大学/東北大学大学院)、山本雅子(愛知大学)、仲本康一郎(山梨大学))。今年度も、ワークショップはグループ発表となり、5日の午後3件、6日午前2件、5日の午後、6日の午前に研究発表が合計で30件あります。ポスター発表22件は6日の13:10-14:10となっています。

海外からの講演2件:5日の午後12:40-14:10にHartmut Haberland先生

(Roskilde University)の講演、6日の午後14:20-16:50にLaurence Horn先生(Yale University)の特別講演があります。

書店展示(研究社、ひつじ書房、開拓社など)もあります。

【受付について】本年度も昨年度より開始した会員番号による受付をいたします。Newsletterの宛名シールに会員番号を明記しています。

【参加費(大会資料代)】

大会参加費:会員は2000円で、非会員は3000円です。

受付は5日11時半から、6日は9時半から開けています。開始直前が一番混雑しますので、お早めにお越し下さい。

＜なお、これまでの『Program & Abstracts(ハンドアウト集)』(2000年)から『予稿集』(2007年まで)のバックナンバーはすべて無料で差し上げますので、ご自由にお持ち帰りください＞

【懇親会】

・会費:4,000円(参加希望者は受付で大会参加費と一緒に支払ってください。)

・会場:龍谷大学紫英館6Fグリル<大会は2号館で、紫英館まで学内の移動が必要です。>

【当日の昼食】土曜日のみ、学館コンビニ(10:30-15:00)と学館食堂(11:00-14:30)がオープンしていますが、日曜は大学の食堂が利用できません。なお、お弁当は手配しておりませんので、各自ご持参くだ

さい。

【ホテルの紹介】学会ではホテルの紹介はいたしておりませんがホームページにホテルリスト上げてありますので参考にして下さい。学会ホームページ:

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/>

【アクセス】龍谷大学深草キャンパスへのアクセスにつきましては、大学のホームページ:

<http://www.ryukoku.ac.jp/fukakusa.html>
をご覧下さい。

★ 会費の振り込みについて

会費の振り込みにつきましては、未納の方は同封の振替用紙で11月末までにお払い下さい。振替用紙が同封されている方は、今年度分が未納の方です。同封されていない方は、すでに納入済みですので結構です。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払い下さい。なお、行き違いがある場合は、ご容赦下さい。会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっています。

なお、今年度は、会費の徴収は、学会当日には行いません。未納の方は、上記同封の振替用紙にてお振り込みいただくか、当日、振り込み用紙を受付でお渡します。新入会員の方にも受付で振り込み用紙をお渡しします。年会費は、一般会員:5,000円、学生会員:4,000円、団体会員:6,000円です。

郵便振替口座:00900-3-130378

口座名:日本語用論学会

★ 龍谷大学文学部特別講義

堀江薫先生(東北大学教授)

タイトル:言語のタイポロジーと認知類型論:英語、日本語、韓国語、ドイツ語を中心に

1. 日時 2009年12月7日(月)9:00-10:00
2. 場所 龍谷大学文学部大宮キャンパス、清和館3階ホール(JR京都駅から徒歩10分)<大会の深草キャンパスではな

いので注意してください。 >
http://www.ryukoku.ac.jp/about/campus_traffic/traffic/t_omiya.html

★龍谷大学学術講演セミナー特別講義

Laurence Horn教授による特別講義

タイトル: Aspects of Multiple Negation

1.日時: 2009年12月7日(月) 10:30-12:00

2.場所: 龍谷大学文学部大宮キャンパス、
清和館3階ホール

この2つの講演会の連絡先: 龍谷大学文学部教授東森勲 higasimo@gmail.com

《日本語用論学会第7回「談話会」のお知らせ》

第7回「談話会」を下記の要領で開催いたします。この談話会は、1、2名の講師をお招きして最近のご研究について講演をしていただき、その後、ディスカッションを通して、それぞれの分野の理解を深めることを目的としておこなうものです。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

記

講師: 久保 進 (松山大学)

司会: 児玉徳美

日時: 2010年4月18日(日) 15:30 ~
17:30 (受付15:15~)

場所: 龍谷大学 大宮キャンパス

演題: 「動的言語行為論における調整」

概要: 言語行為は、通例、情報の伝達を目的とする情報伝達的言語行為(informational speech acts)と会話参与者間の心の通いを目的とする交感的言語行為(transactional speech acts)に分けて考察される(Brown and Yule 1987: 1 参照)。しかしながら、その分析対象が談話に拡張されたとはいえ、Vanderveken and Kubo(2002)など従来の言語行為論の主たる関心事は前者であった。本発表では、Piaget(1959)や Vygotsky(1962[1934])に倣い、交換的言語行為の重要な機能に調整(regulation)を据える。言語行為における調整は、ダイナミックな談話の流れにおい

て心的均衡(equilibrium)の歪みを生じた心に均衡を取り戻す心的プロセスであり、Piaget が均衡化(equilibration)と呼ぶ心の可逆性を実現する心的変化である。そして、それを充足するための言語行為が調整行為(regulatory act)である。その意味で、調整で補完された言語行為論は動的言語行為論(dynamic speech act theory)と位置づけることができる。本発表では、談話を孤独口話(solitary talk)、付き添いつき独白(baby-sat monologue)、対話(dialogue)にわけ、動的言語行為論の枠組みの中で、それぞれの談話のなかで発動される(複数の)調整行為が、それぞれどのような情動(emotion)やモダリティ(modality)によって駆動され、かつ、どのような展開を生み出すか、そして、その駆動における成功条件と、その駆動がもたらすべき充足条件とはどのようなものかを考察する。

講師プロフィール: 1949 年生まれ。大阪府出身。松山大学教授。

著書: *The Semantics/Pragmatics Interface from Different Points of View* (共著、Elsevier、1999年)、『入門 語用論研究』(共著、研究社、2001年)、*Essays in Speech Act Theory* (共編著、John Benjamins、2002年)、『発語内行為の意味ネットワーク』(編著晃洋書房、2002年)、*Politeness and Regulation* (共著、晃洋書房、2007年)、『発話行為理論の原理』(編訳、D.ヴァンダーヴェーケン著、松柏社、1995年)、『意味と発話行為』(監訳、D.ヴァンダーヴェーケン著、ひつじ書房、1997年)、他。

お問い合わせ先: 日本語用論学会事務局: 〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125番地の1 龍谷大学 東森勲 研究室内 Tel 075-343-3311 (代表)、
Fax 075-343-4302

E-mail: psj.secretary_at_gmail.com (注意: _at_を半角の@に置き換えて下さい)

《SIG 関連報告》

9月から、SIGは平塚徹(事業副委員長)の担当となりました(前担当は林礼子事業委員長)。現在、以下の3件の研究会グループ(SIG)が活動しています。

- ・モダリティ研究会 代表: 澤田治美
研究期間: 2009年4月1日~2011年3月31日
- ・話し言葉の研究会 代表: 吉成 祐子
研究期間: 2009年4月1日~2011年3月31日
- ・関連性理論研究会 代表: 武内 道子
研究期間: 2008年4月1日~2010年3月31日

モダリティー研究会については、第12回大会でワークショップ「多様な構文環境に現れたモダリティーの解釈をめぐって」を行います。

各研究会の活動は以下の通りです。

★モダリティ研究会報告書

モダリティーの研究を目的としており、現在は毎週水曜日、午後5時より2時間、読書会や研究発表のための討論会を行っています。現在読んでいる文献は、次の文献です。

“Mood and Modality in English.” Ilse Depraetere and Susan Reed, 2006. *The Handbook of English Linguistics*. Edited by Bas Aarts and Apri McMahon.

★話し言葉の研究会報告書

談話分析による話し言葉の研究を行っています。今年度は、Debra Cameron. 2001. *Working with Spoken Discourse*. SAGE publications. の翻訳が活動の中心となっており、チーム別に行われるネット経由の討議や、研究会の実施により、研究を進めています。

★関連性理論集

昨年より月に1度のペースで、下記の論文の輪読会を行っています。

Wilson, D & R. Carston. 2007. A unitary approach to lexical pragmatics: Relevance, inference and ad hoc concept. In Burton-Roberts, Noel (ed.) *Pragmatics*. 230-259. London: Palgrave.

また、Wilson 教授 (UCL) による Pragmatic Theory と Issues in Pragmatics: Lexical Pragmatics(および Wharton 氏の Logic and Meaning もいれて)の授業のレクチュアノートを編集し、翻訳に取り組んでいます。(近々出版の予定)

新規研究会の申し込みは常時受け付けておりますので、

平塚 (hiratuka_at_cc.kyoto-su.ac.jp) (注意:_at_を半角の@に置き換えて下さい)までお申し込みください。

《『語用論研究』編集委員会より》

★『語用論研究』への応募の審査結果と11号の発行について

今年の3月31日に締め切りました『語用論研究』への投稿募集には、合計11件の応募がありました。その内容は、ポライトネス(敬語)、直示、指示表現、共感(視点)、コミュニケーション研究、モダリティ、談話文法を含む広範囲の分野に及ぶものでした。査読委員による厳正な審査と編集委員会での慎重な検討の結果、今回は一件の論文が(一部修正・変更の条件付で)次号(第11号)に掲載されることになりました。尚、不採用になりました論文に対しては、1) 関連の先行研究への参照・言及が不十分である、2) データの検討が質と量において不十分である、3) 論文の主張に一貫性や説得力がない、といった問題点の指摘が多く見られました。また、幾つかの論文についてはその内容が語用論の分野に合致していないという指摘もありました(審査結果については、4~6ページ(4,000~6,000語)におよぶ詳しいコメントを付けて、7月上旬に、全員の応募者にお知らせしました)。原稿作成に際しては、特にこれらの点にご留意いただき、今後も奮って応募いただきますようお願いいたします。

第11号(2010年1月頃発行予定)には上記の一般応募論文の他、第11回大会講

演論文 (2 件)、書評論文、海外における語用論研究の動向の報告、学会創設 10 周年記念特別記事が掲載されます。

★『語用論研究』への投稿の募集

1. 原稿提出の締め切りが毎年 3 月 31 日に変更になっていますのでご注意ください。
2. 投稿規程にもありますように、『語用論研究』への投稿は会員に限りますので、今まで会員であった方も応募時に当該年度の会費を未納の方は、原稿送付の前に忘れずにお支払いください。
3. 次次号 (第 12 号) も (使用言語は) 日本語または英語の何れかによる論文の募集となります。
4. 投稿規程は、本学会のホームページ <<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/>> でもご覧いただけます。

★『語用論研究』投稿規定

(日本語による応募の場合)

1. 投稿は会員に限るものとする。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること)
2. 投稿論文は未発表の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同時に複数の論文を投稿することや、同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かるような書き方は避ける。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿は 1 年中受け付けるが、当該年度の号の最終投稿締め切りは、毎年 3 月 31 日とする。
5. 採否決定を 9 月末日頃とする。
6. 枚数、書式など。
 - a. 原稿枚数:A4、横書き、20 枚以内(注、参考文献を含む)。
 - b. 書式: 1 ページ、日本語の場合は 32 行 38 文字とする。英語の場合は 1 ページ、1 行 70 ストローク、1 ページ 32 行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や参考文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入は可能。
 - c. 原稿の 1 ページ目はタイトルのあと 1 行アケで氏名、そのあと 2 行アケでアブストラクト (英語で、1 行 70 ストローク、8 行以内)、さらに 2 行アケでキーワード、そのあと 2 行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名、謝辞を書かない (掲載決定後に編集委員会より指示する)。
 - d. 例文の前後は 1 行アケル。
 - e. 各節の前は 1 行アケル。
 - f. 注は、1、2、3 のように、括弧を用いない数字だけとする。
 - g. 見出しのサブセクション番号は、1.1. のように、数字の後にピリオドを置く。
 - h. セクションの「はじめに」または「序論」は、1. ではじめる。
7. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
8. 参考文献 (「参考文献」、「引用文献」という表現はしない) の書式は以下の例にならう。

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hooper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語語用論—』東京:三省堂.

無藤 隆. 1983. 「言語とコミュニケーション」、坂本 昂 (編)『思考・知能・言語』(現代基礎心理学)、第 7 巻、

161-189、東京：東京大学出版会。

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」、
『言語』、24: 2 (2月号)、62-69.

9. 参考文献に関する注意事項

a. 参考文献は本文中で引用したものと
みとする。

b. 英語の文献、日本語の文献を混在さ
せて、アルファベット順に並べるこ
と (別々に分けない)。

c. 共著者の場合、英文は & を使わず
and、日本文は・(なかぐろ) とする。

d. 雑誌については日本語、英語とも、
巻数、号数、ページ数を明記する。

e. 英語の文献名で、語頭については、
内容語は大文字、機能語は小文字と
する。第 1 語の語頭のみ大文字で、
あとは小文字という形式はとらない
(上記 8 の英語の参考文献の書式参
照)。

f. 採否決定前の投稿論文に投稿者本人
の著作を多数挙げて、本人と分かる
ような書き方をしない。

10. 提出部数：原稿は 6 部提出する。(コ
ピーで可)。

11. 抜き刷りを希望する場合、費用は執筆
者の負担とする。

12. 執筆者構成は初校のみとする。校正の
際の内容にかかわる原稿への加除は
認めない。

13. 「原稿ファイル」とは別に、氏名 (ふ
りがな)、郵便番号、住所、所属、職
名、連絡先電話番号、FAX 番号、e-mail
アドレスを記載した「個人情報ファイ
ル」を作成する。この二つのファイル
共、ワード及び PDF の両方で作成する。

14. 送付方法と送付先：

「原稿ファイル」及び「個人情報ファ
イル」を下記宛て送付する。送付は、
1) ファイルを添付した電子メールか
2) ファイルを保存したフロッピーデ
ィスク等の (書留) 郵送のいずれかとす
る。

送付先：

(電子メールによる場合)

psj-sip_at_andrew.ac.jp (注意：_at_
を半角の@に置き換えて下さい)

(『語用論研究』編集委員長 林宅男)

(原稿送付の際は、確実に受信できるよ
うに、出来るだけ無料メールアドレス
のご使用をお控えください。)

注意：電子メールによる送付の場合、
送信後、2 週間経っても、原稿を受理し
た旨の確認返信メールが無い時には、
必ず、こちらからの確認返信メールが
あるまで、takuo_at_kcc.zaq.ne.jp (_at_
を半角の@に変換) に連絡してくださ
い。

(郵送による場合)(「投稿論文在中」と
封筒の表に朱書きのこと)

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1
- 1 桃山学院大学 林 宅男

TEL (0275)54-3131

Fax (0275)54-3202

15. 掲載決定後に、最終原稿を 3 部上記の
宛先に郵送し、同時に最終原稿の添付
ファイルを、上記のメールアドレスに
送付する。提出原稿は原則として返却
しない。

★ The Style Sheet of English papers for
Studies in Pragmatics

1. Manuscripts

a. This journal only accepts contributions
from members of the Society.
Non-members may apply for membership
by contacting the business office,
psj.secretary_at_gmail.com(Replace
“_at_” with “@”).

b. Papers submitted to Studies in Pragmatics
must not have been published previously,
nor should they be under consideration for
publication elsewhere. Authors may
submit only one manuscript at a time for
consideration. Papers that will be
presented at the annual convention may
not be submitted.

c. Manuscripts must be written in such a
manner that the authors cannot be

- identified. Authors' names and contact information should appear on a cover sheet separate from the rest of the manuscript.
- d. All manuscripts should be submitted on A4 size paper.
 - e. Manuscripts for papers should be no more than 20 pages in length, excluding references and footnotes.
 - f. Type in 12-point font, 32 lines to a page.
 - g. Leave margins of 2.5 cm (1 inch) on the right and left, and 3 cm on the top and bottom.
 - h. For authors whose native language is not English, it is advisable that, prior to submission, manuscripts be corrected and edited by a qualified native speaker of English.
 - i. Authors are responsible for the first proofreading only. Corrections should be limited to typographical errors.
 - j. Authors may purchase offprints of their articles.
 - k. On a separate coversheet, please indicate the title of the paper, author's name, e-mail address, affiliation & position, and postal address. Authors are requested to submit the manuscript file and the coversheet file in both WORD format and PDF format by e-mail or by regular mail.
 - l. If submitting by regular mail, save the manuscript file and coversheet file on a floppy disk or other storage medium and send by a registered mail.
 - m. Address where the manuscripts should be sent:

<e-mail>: psj-sip _at_ andrew.ac.jp
(Replace “_at_” with “@”) (Dr. Takuo Hayashi, chief editor for Studies in Pragmatics)

<regular mail>:
Dr. Takuo Hayashi (chief editor for Studies in Pragmatics)
Momoyamagakuin University (St. Andrew's University)
1-1, Manabino, Izumi city, Osaka、
594-1198, JAPAN

Please refrain from sending manuscript files using a free mail address, so that they should be received without problem.

If, after submitting a manuscript by e-mail, you do not receive confirmation of receipt of your manuscript within two weeks, please send an e-mail message, requesting such confirmation, to: takuo_at_kcc.zaq.ne.jp (Replace “_at_” with “@”)
 - n. Submission deadline: Submissions are welcome at any time, but manuscripts for a given year's issue must be received by March 31st of that year. Submissions received after that date will be considered for the following year's issue. Submitted papers are refereed and authors are notified of the results around the end of September.
- ## 2. General Format
- ### Abstracts:
- a. Abstracts should be not more than 8 lines (about 100 words) in length.
 - b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract itself should be preceded and followed by two blank lines and should begin with the word 'Abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 keywords should be given below the abstract, preceded by 'Keywords'.
- ### The Main Text of the Paper:
- a. The introductory section or prefatory remarks should be numbered from 1, not 0. Subsection numbers should be followed by a period (e.g., 1.1.).
 - b. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.
- 《新刊案内》
安武知子. 2009. 『コミュニケーションの英語学—話し手と聞き手の談話の世界

- 一』 開拓社。
- 橋爪大三郎. 2009. 『はじめての言語ゲーム
もっともわかりやすいヴィットゲン
シュタイン入門書』 講談社現代新書.
- 林 宅男. 2008. 『談話分析のアプローチ 理論と実践』 研究社.
- 加藤 澄. 2009. 『サイコセラピー面接テキスト分析ーサリヴァンの面接トランスクリプトに基づいて』 ひつじ書房.
- 加藤 茂. 2007. 『記号と意味』 勁草書房.
- 小泉 保. 2009. 『日英対照 すべての英文構造が分かる本』 開拓社.
- メイナード、泉子・K. 2009. 『ていうか、やっぱり日本語だよ--会話に潜む日本人の気持ち』 大修館書店.
- 白川博之. 2009. 『「言いさし文」の研究』 くらしお出版.
- シルヴァスティン、マイケル (著) 小山亘 (編) 榎本剛士他 (共訳). 2009. 『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡 シルヴァスティン論文集』 三元社.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論 文法のゲシュタルト性』 大修館書店.
- Brizard, F., Ostman, J-O. and J. Verschueren. (eds.) 2009. *Grammar, Meaning and Pragmatics*. (Handbook of Pragmatics Highlights, vol. 5) Benjamins.
- Christie, Christine. 2010. *Linguistic Politeness: Theories and Applications*. Edinburgh UP.
- De Brabantner, P. and M. Kissine (eds.) 2009. *Utterance Interpretation and Cognitive Models*. Emerald.
- Geyer, Naomi. 2010. *Discourse and Politeness: Ambivalent Face in Japanese*. Continuum.
- Ishihara, Noriko and Andrew D. Cohen 2010. *Teaching and Learning Pragmatics : Where Language and Culture Meet*. Longman.
- Ishikawa, Kuniyoshi. 2009. *Discourse Representation of Temporal Relations in the So-Called Head Internal Relatives*. Hituzi Syobo. (学会事務局へ寄贈されました。お礼申し上げます)
- Jeffries, Lesley. 2010. *Opposition in Discourse : The Construction of Oppositional Meaning*. Continuum.
- Mey, Jacob L. (ed.) 2009. *Concise Encyclopedia of Pragmatics*. 2nd. Elsevier Science.
- Norde, Muriel. 2009. *Degrammaticalization*. OUP.
- Ruiz, Javier Herrero. 2009. *Understanding Tropes : At the Crossroads between Pragmatics and Cognition*. Peter Lang.
- Sauerland, Ulrich and Yatsushiro Kazuko (eds.) 2009. *Semantics and Pragmatics: From Experiment to Theory*. Palgrave Macmillan.
- Taguchi, Naoko (ed.) 2009. *Pragmatic Competence in Japanese as a Second Language*. Mouton de Gruyter.
- Tendahl, Markus. 2009. *A Hybrid Theory of Metaphor: Relevance Theory and Cognitive Linguistics*. Palgrave Macmillan.
- Wharton, Tim (2009). *Pragmatics and non-verbal communication*. Cambridge UP.
- (この項、田中廣明氏ほか2名の方よりご協力をいただいた。)

☆☆☆☆☆☆

《編集後記》

少し遅めの日本語用論学会10周年の思

い出となったが、興味深く、楽しく読ませていただいた。それぞれ表現は異なっているものの、酒を酌み交わし、こころを通じ合わせながら、この学会が設立されていった様子が、目に浮かぶようである。

最近さかんな、言語の起源と進化に関する議論も、こころを通じ合わせるといふ側面に注目しているように思う。わたしたちは、単語とその組み合わせ方を知れば、ことばが操れると思いがちだが、そうではなさそうなのだ。チンパンジーがせいぜい200語程度しか覚えられず、1語文や2語文しか語れないのは、記憶力や文法力の乏しさというよりは、それ以前に、こころを通わすといふヒト特有の性向を欠くためだといふのである。(e.g. Tomasello 2008)

じ合わせるというヒトの性向のことであり、文法化から言語起源を論じるときにも (Heine and Kuteva 2007)、言語進化に伴う構造の複雑化を捉えるときにも

(Givon 2009)、頻繁に言及される。この原則は、ヒトと言語の本質を見抜いた提案だったといふほかない。

ヒトが、自らの知るところを他者に供与し、他者の知るところを我がものとすることによって全体として高いレベルの文化を築いてきたように、我が学会も、お酒を酌み交わし、こころを通じ合わせ、立ち上げ進化してきたのであれば、その伝統はまもりたいものだ。とりあえずすぐそこに迫っている龍谷大学での学会、多くみなさまにおめにかかり、お酒を酌み交す機会があればと思う。

(ニューズレター編集 中村芳久)

グライスの協調の原則は、こころを通

